洗足学園音楽大学

大学院リサイタルシリーズ①

～秋風のはこぶ旋律～

第一部

芳村　早紀子

宍戸育美

-休憩(10分)-

第二部

筱﨑　愛

MUQING　SUN

日程　2022年10月1日(土)　15:00開演　14:40開場

場所　洗足学園音楽大学　シルバーマウンテン　1F

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- 大声や対面での会話はお控えください。
- 演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- 休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- 客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- 出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- 万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催　洗足学園音楽大学・大学院

1.芳村 早紀子(ソプラノ) 院2年　Pf. 林 菜月

F.プーランク／歌曲集《偽りの婚約》より1.アンドレ夫人 6.花
(Francis Poulenc / Fiançailles pour rire 1.La dame d'Andre 6.Fleurs)

F.プーランク作曲の歌曲集《偽りの婚約》は1939年にルイーズ・ドゥ・ヴィルモランの詩により作曲された6曲からなる歌曲である。この中から今回第１曲目、第６曲目を演奏する。
1、アンドレ夫人(La dame d'Andre)は自分が出会ったアンドレ夫人が生涯にわたって大切な人なのか、それとも行きずりの気まぐれにすぎないのか自問する。
６、花(Fleurs)は色あせてしまった愛の思い出を未だに燃やしてづけている一人の婦人の哀愁に満ちた姿を描写している。

F.プーランク／歌劇《ティレジアスの乳房》より「いいえ、ご主人様」
(Francis Poulenc / Les Mamelles de Tirésias, Non Monsieur mon mari)

歌劇《ティレジアスの乳房》はF.プーランク作曲、原作はギヨーム・アポリネールの戯曲による。初演は1947年6月3日にパリ、オペラ・コミック座で、ダリウス・ミヨーに捧げられた。当時フランスは少子化による人口減少が社会問題になっており、オペラを通して問題提起をした作品。「いいえ、ご主人様」は若くて美しいテレーズが私はフェミニストで、亭主に従うなんてもう嫌だ、子供なんて産まずに好きな仕事をしてみたい！と野望を叫ぶと、なんとテレーズの顔にはひげが生え、胸は風船に変わり飛んで行ってしまう。風船をライターで火を付け割ってしまい、男の体になったテレーズは力強くスペイン風に歌う。

J.マスネ／歌劇《マノン》より「さよなら、小さなテーブル」
(Jules Massenet / Manon Adieu, notre petite table)

歌劇《マノン》はJ.マスネ作曲、原作はアヴェ・プレヴォーの小説「マノン・レスコー」による。初演は1881年1月19日パリ、オペラ・コミック座。「さよなら、小さなテーブル」は2幕で歌われるアリアである。マノンとデ・グリューは駆け落ちをして貧しくも愛のある幸せな生活を送っていたが、ある日マノンのいとこレスコーと、貴族のブレティニに見つかってしまう。その際にブレティニは秘密でマノンにデ・グリューは今夜父親に連れ戻されること、自分のところに来れば今より贅沢な暮らしが出来る、と誘惑する。マノンは贅沢な暮らしに心が揺れ動き、デ・グリューとの別れを決意する。マノンはまだ迷いの消えない自分を言い聞かせ、デ・グリューとの幸せな生活の思い出と決別をこのアリアで歌う。

L.バーンスタイン／歌劇《キャンディード》より「華やかに着飾って 」
(Leonard Bernstein / Candide, glitter and be gay)

歌劇《キャンディード》はL.バーンスタイン作曲、原作ヴォルテールの「カンディード、あるいは楽天主義説」による。1956年10月29日に初演されたが、失敗に終わる。しかし、その後何度も改定を重ね、1974年に大成功を収める。
「華やかに着飾って」は主人公キャンディードの恋人で領主の娘あるグネゴンデ歌うアリア。敵にお城を支配され、家族は皆殺し、自身はパリで金持ちの妾にされてしまう。心ならず魂を売ってしまった今の自身の境遇を嘆くも、せっかくなら今の裕福できらびやか生活、宝石やシャンパンを楽しんで、自分の気高さをしらしめてやる！と明るく歌う。

2.宍戸 育実(ヴァイオリン) 院2年　Pf. 松下 倫士

カロル・シマノフスキ / ヴァイオリン ・ソナタ 作品9
(Karol Szymanowski / Violin Sonata Op.9)

カロル・シマノフスキは1882年10月6日、ウクライナのティモシュフカにポーランド人の血筋をひく貴族として生まれた。芸術愛好家で読書に親しむ知性の人であった父とピアノをこよなく愛する母の元で育った彼が、音楽家としての道を選んだことは自然なことと言えよう。また、シマノフスキが没する1937年までの間、そのほとんどはポーランドがロシア、プロイセン、オーストリアの三国によって分割支配されていた時期に含まれており、そのことも彼の音楽家としての生き方、そして彼の音楽にとって重要な意味を持つことは想像に難くない。実際、彼の作品はポーランドの激動の時代から多大な影響を受けており、その作風は、ワーグナーやリヒャルト・シュトラウス、レーガーなどの色が濃く、後期ロマン派に傾倒した創作初期、古代ギリシャやイスラム、オリエントなどを研究し、ドビュッシーを始めとする印象主義音楽に影響を受けた創作中期、ポーランド、特に南部のタトラ山地の民俗音楽を取りいれた創作後期と、時期によって大きく異なる。シマノフスキはその生涯で幅広い分野の作品を残しているが、その大半をピアノ独奏曲が占める為、ピアノ作品の作曲家として評価されることが多い。しかしながら、ヴァイオリン曲はピアノ独奏曲に比べ多くはないが、シマノフスキが終生書き続けたジャンルであり、彼の全創作中でも重要な位置を占めている。

さて、今回演奏する《ヴァイオリン・ソナタ》は、同じ編成の傑作《神話》に比べて演奏される機会が極端に少なく、その影に隠れてしまっているが、ドイツ・ロマン派に倣った旋律や和声の豊麗さと、全曲に漲る新鮮な息吹は、この作品を捨てがたいものにしている。

・第一楽章　アレグロ・モデラート・パテティーコ

ニ短調のソナタ形式。暗い情熱をたたえたドラマティックな第一主題と、陶酔的で憧憬に満ちた第二主題との対比が美しい楽章。随所にワーグナーの影響がらられる。

・第二楽章　アンダンティーノ

イ長調の神秘的で清冽な雰囲気の楽章。中間部のスケルツァンドも印象的である。

・第三楽章　アレグロ・モルト・クワジ・プレスト

ニ短調　ソナタ形式。激しい上行音階から始まり、その後カノン風の第一主題、色彩豊かな和声が際立つ美しい第二主題へと続く。エネルギッシュで華々しい終結部をもって全曲が閉じられる。

3.筱崎 愛(ヴァイオリン) 院1年　Pf. 田中 麻紀

メンデルスゾーン / ヴァイオリン協奏曲 ホ短調
(Mendelssohn / Violin Concerto in E-minor)

フェリックス・メンデルスゾーンは1809年に、ドイツのハンブルクでユダヤ系の家系に誕生した。銀行家の父を持ち比較的裕福であり、姉と共にピアノなどの音楽の手ほどきを受け、神童として世に知られていた。9歳にして演奏会に初出演し、作曲は10歳から始めていた。同世代の音楽家にロベルト・シューマンやフレデリック・ショパンなどが挙げられ、彼らとの交流もあった。38歳という若さで亡くなりながらも、数多くの名曲を残したメンデルスゾーン。ヴァイオリン協奏曲は2曲かいており、ホ短調 Op64は3大ヴァイオリン協奏曲のひとつに称され、「メンコン」の愛称で親しまれている。
この曲は彼が常任指揮者を勤めていた、ライプツィヒゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスター、フェルディナンド・ダーヴィトへ送られた曲である。作曲の際に技術的なアドバイスをダーヴィトから受けながら、1838-1844の6年かけて作曲された。3楽章で構成され、急-暖-急と一般的な形式をとっている。

・第一楽章 アレグロ モルト アパッショナート
当時には珍しく、オケによる序奏が２小節でソロがすぐに第一主題を奏でる。オケによる経過主題を引き継ぎ、その後第2主題もオケから貰う。展開部では3連符が多く用いられ、メンデルスゾーン自身が書いたカデンツァに入る。カデンツァの終わりも明確にされておらず、ソロのアルペジオにフルートが第1主題をのせだんだんと再現部に移行する。ソロによる第1主題の再現はされず、第2主題がホ長調で再現される。そのままCodaへ入る。

・第二楽章 アンダンテ
三部形式が取られており、静かで穏やかな旋律が奏でられ、中間部では対照的に短調で動きのあるテーマが使用され、また落ち着いたヴァイオリンの旋律に戻っていく。

・第三楽章 アレグレット ノン トロッポ
前楽章の余韻を残した序奏の後、軽やかで躍動感溢れるメロディが奏でられる。この楽章はオーケストラとソロとの対話が特に印象的であるが、終盤に向かっていくと共に一体となり最後は華々しく幕を閉じる。

4.孫 沐清 (マリンバ) 院2年

Hwang kuenYean / Secret Path

中国大陸に比べ、近代に植民地政策の影響を受けた香港や台湾は、19世紀に西洋の文化や技術の影響を多く受けたため、音楽教育も西洋の形態を多く取り入れ、マリンバもこの地域で早くから発展した。そして、異文化間の交流と発展とともに、西洋楽器のマリンバも、中国現地の文化伝統をベースに、現地の伝統文化の特徴を持った多くの楽曲を生み出してきた。

この木琴の独奏曲は台湾JU打撃楽団員林敬華が2005年に依頼したもので、台湾の泣く曲3曲を素材にしたものです：“台南哭調,一隻鳥仔,宜蘭哭調”などがあります。よく見かける木琴の演奏テクニックを駆使して連係させた幻想曲風の木琴独奏曲です。“秘径”は人に知られていない小道を探求することを意味し、沿道の風景は絶えず変化し、時には光り輝き、時には暗くなることを意味します。時には山を越え、時には市街地・南から北に潜み、台湾という土地を歩いて、故郷の思い出と故人に与えられた関わりを感じています。

♪profile♪

1. 芳村 早紀子(ソプラノ) Sakiko Yoshimura

・洗足学園音楽 大学音楽学部管楽器コースにフルートで入学。学部3年次に声楽科に転科し、同大学声楽コース、専攻科を卒業。これまでにフルートを酒井秀明、声楽を塩田美奈子、藤井麻美の各氏に師事。現在洗足学園音楽大学院声楽コース在学中。

2. 宍戸 育実(ヴァイオリン) Ikumi Shishido

・栃木県出身。5歳より才能教育研究会（スズキ・メソード）でヴァイオリンを始める。これまでにヴァイオリンを川沼文夫、栗原りか、水野佐知香、近藤薫、ヴィオラを古川原裕仁、大野かおる、須田祥子、室内楽を安藤裕子、川田知子、須田祥子、安永徹、市野あゆみの各師に師事。洗足学園音楽大学弦楽器コース首席卒業。同大学大学院音楽研究科2年在学中。

3. 筱崎 愛(ヴァイオリン)　Ai Shinozaki

・10歳からヴァイオリンを始める。これまでにヴァイオリンを石川理恵子、水野佐知香、ヴィオラを古川原裕仁、室内楽を安藤裕子、羽川真介の各師に師事。オーケストラ特待生として洗足学園音楽大学に入学、卒業後同大学院在籍中。フェデリコ・アゴスティーニ、オレグ・クリサ、竹澤恭子などの特別レッスンを受講。2019、2020年度前田奨学金を授与され、第11回音楽大学フェスティバルに学校代表として参加。第25回長江杯国際音楽コンクール第4位。

4. 孫 沐清 (マリンバ)　Muqing Sun

・1997年中国本土山西省太原市に生まれる。大学からマリンバの研究を始める。大学時代、打楽器奏者として打楽器アンサンブルと中国民族音楽アンサンブルに参加。現在、洗足学園音楽大学院2年在学中。